

閲覧ニュース

56号

1988. 12



ジェラール／アモールとプシケ（アモールの最初の接吻を受けるプシケ）

肩に降る雨

立川 昭二

肩に降る雨の冷たさも気づかぬまま
歩き続けた
肩に降る雨の冷たさにまだ生きてた
自分を見つけた

これは、中島みゆきの「肩に降る雨」という歌の出だしである。

ことしの夏と秋は雨がよく降った。駅から雨に濡れて歩く人をよく見かけた。そんなとき、私たち日本人は雨は「肩に降る」と感じる。

『中島みゆき全歌集』（1986年、朝日新聞社）をたどってみると、彼女の歌に出てくる身体語のなかで、出度数の多いのは、瞳や唇ではなく、意外に肩と髪が多い。

月の光が 肩に冷たい夜には
祈りながら歌うのよ
深夜ラジオの かすかな歌が
あなたの肩を 包みこんでくれるやうに
(「夜曲」)

そして、「肩に降る雨」とおなじように、「肩」ということばではじまる歌が、ほかに二つもある。

肩にまつわる 夏の終わりの 風の中
まつりばやしが 今年も近づいてくる
(「まつりばやし」)
肩を貸してください 雨の中
わたし 赤い鼻緒をなのおすまで
(「こぬか雨」)

肩はkataという音感が、歌の出だしにもいいのかもしれない。

それにしても、雨は肩に降り、月の光は肩に冷たく、風は肩にまつわる——という意識は、日本人独特のものである。

*

日本人は肩意識が強い国民といわれる。その証拠に、肩という身体語のはいった慣用語がいくつもある。「肩がこる」「肩にかかる」「肩の荷」「肩をならべる」「肩をもつ」「肩身がせまい」「肩をかわす」「肩をおとす」「肩ごし」「肩書き」……。おそらく、身体語のはいった慣用語としては、「腹がたつ」「腹をさぐる」……等の「腹」とならんで、いちばん多い。

日本では頸肩腕障害のことを「肩こり」といい、日本人にはこの肩こりが非常に多い。英語ではこれをstiffneck(首のこり)といい、フランス語ではmal au dos(背の痛み)と表現している。民族によって身体意識の差があり、それが病態と病名の違いとなってあらわれてくる(吉竹博『「おつかれさん」の研究』1984年、ダイヤモンド社)。

アメリカの女性文化人類学者ルス・ベネディクトによれば、日本人は緊張(テンション)の強い民族という(『菊と刀』1970年、社会思想社)。その緊張は、日本人が大切におもっている肩にとりわけ集中する。だから日本人は肩がこりやすいのではないか。

また試験のときなどにアガルくせの人がいるが、こういう体癖の人はじっさいにどちらかの肩があがっている。

*

肩でおもい出すのは、夏目漱石が「修善寺の大患」のあと、入院中の病院でつくった次の句である。明治43年10月22日の日記に出ている（『漱石全集』第13巻）。

肩に来て人懐かしや赤蜻蛉

病後のなんともいえない身体感覚が、この肩という一語にぴたりとあらわされている。

与謝野晶子『春泥集』にもこんな歌がある。苦しみは肩に負わされると日本人は感じる。

いと重く苦しき事をわが肩に
負はせて歳は逃げ足に行く

さいきんでは、話題になった俵万智『サラダ記念日』（1987年、河出書房新社）のなかに、こんな歌がある。

職場から駆けつけて来し汝の肩に
男印の黄金の糸くず

銀色のトランペットを吹く肩に
マイクの影がはりついている

男が働いているとき、男がトランペットを吹くとき、女にはその肩が目につく。『サラダ記念日』で多い身体語は、「手」「背中」そして「肩」であった。

ところで、中島みゆきは「肩に降る雨」で、次のように歌っている。では、「肩に降る雨の冷たさ」は、アナタにはどのような声に聞こえますか……？

肩に降る雨の冷たさは生きろと叫ぶ
誰かの声
肩に降る雨の冷たさは生きたいと迷う
自分の声
（歴史学）

□冬休み中のお知らせ

冬期休暇中の貸出、開館等については下記のとおりとします。

1) 長期貸出

貸出期間 12月12日（月）～1月14日（土）
冊数制限はありません。
（但し、雑誌は対象外です。）

2) 開館時間

12月19日（月）～^{12月21日（水）}~~12月24日（土）~~
平日 午前9時から午後5時まで
土曜日 午前9時から午後1時まで
1月9日（月）～
平日 午前9時から午後6時まで
土曜日 午前9時から午後1時まで

3) 閉館

12月22日（木）～1月5日（木）

□後期試験に備えて

1) 開館延長

1月21日、28日の両土曜日は午後3時まで開館します。（平日は午後6時まで）

2) 一部図書の貸出期限変更について

試験期になると、一部の図書に利用が集中しがちです。このため、予約の多いものに限り、一夜貸し、三日貸し等の措置をとることがあります。

豊かな感受性

岡本義久

“私の生涯は波瀾に富んだ幸福な一生であった。それは、さながら一編の美しい物語（メルヘン）である。——”

これは『アンデルセン自伝』の冒頭である。私は、その“さながら一編の美しいメルヘンである”という人生に強く引き込まれてしまった次第である。

もし、人が自分の人生を振り返って、この様に言えたとしたら、それは何と素晴らしいことであろう。同時に、どんな人生を送ってきたのだろうかと興味を抱くに違いない。

“私の身の上話しは、世の中が私に語ることを語ろうとするものである。——”

こうして語られているアンデルセンの人生は、波瀾万丈で、最初私には美しいメルヘンとは程遠い苦難の人生の様に思えた。この違いは恐らく、アンデルセン特有の物事に対する感受性が作用しているためなのであろう。

アンデルセンという人は、自分自身を飾らず自然にふるまっていた様である。病人、子供、……そして、どんな著名な人々に対しても常に変らないアンデルセンがいた。権謀術数には一切無縁で、あるのは喜びと悲しみだけである。天は彼に文才とともに、美しい人格を与え給うたように思われる。それは、バルザック、ハイネ、グリム兄弟、エールステッド（電流の磁気作用の発見者）、リスト等々の当時の人々との交流や、デンマーク国王と同様に彼を支えた多くの人々をみても知ることが出来よう。それ故、どんな過酷な人生

にも、素直にこれを受けとめ渡り行くことができたのであろう。

アンデルセンの物事への感受性は、自然児の心から生まれていると思う。それは、彼の多くの童話の中にみられるであろう。

美しいメルヘンの一つに『バラの花の精』がある。自分の知らないうちに愛しい恋人を兄に殺されてしまった妹が、その一部始終を見ていたバラの花の精によって、夢の中でその恐しい事件を知り、悲しみのうちに死んでしまうお話しである。その語り始めは、恋人同志をとりまく美しい花の色や、かぐわしい香りや、暖かい日の光や、あたりのすがすがしい雰囲気かふうっと浮かんで、とても心がなごむものだ。しかし、兄の凶行に始まり、妹が殺された恋人を土中から掘り出し自分の部屋に持ち帰るくだりは一瞬どきとしてしまう。

“——そこで目をかたく閉じて青ざめている首をとり出して、冷たい口にキスをし、美しい髪の毛についている土を払い落して「これだけは大切にしておきましょう。」と言いました——”

にも拘らず、妖精を橋渡しにして、残酷なことを幼児にも楽しめるお話しに仕上げてしまっている。『人魚姫』にしてもそうだ。人魚姫は自分の命を失うほどまで献身的な愛を王子に捧げた。そうしたことに拘らず、人魚姫は三百年の間、不死の魂を得るためにさまよわねばならないのだ。『マッチ売りの少女』にしても同じである。真冬の寒い晩に、

素足の少女がお腹をへらしてふるえながら歩きまわり、とうとう疲れてうずくまりながら凍え死んでしまうなんて。『みにくいアヒルの子』はどうだろう。まわりの仲間から容赦なくののしられている。

アンデルセンの童話の中には、こうした残

酷なことがすうと溶け込み、そして美しいメルヘンになっている。

自分の人生を“——さながら一編の美しいメルヘンである。——”

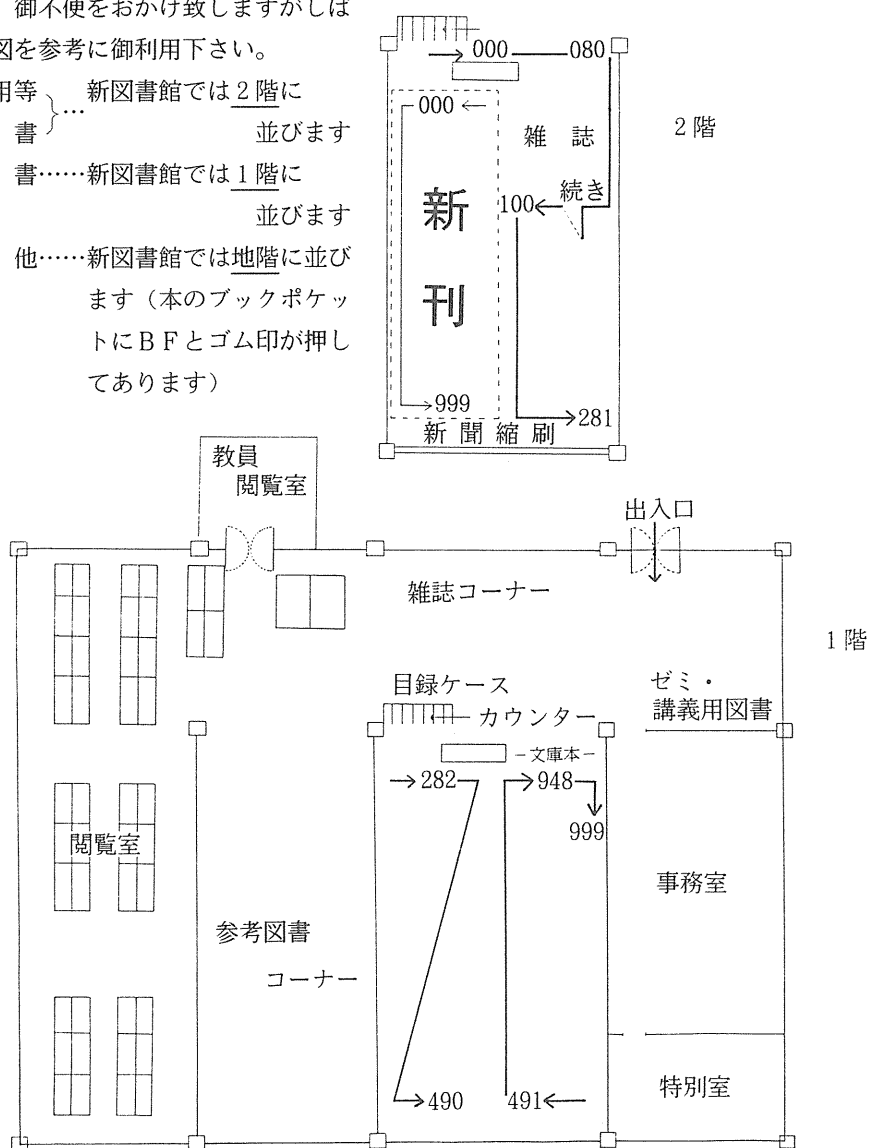
と語っているアンデルセンは、何と素晴らしい感受性の持ち主であろう。（化学）

図書の並び方が変わりました

新図書館移転に備えて、図書の並び方が変わりました。御不便をおかけ致しますがしばらくの間、図を参考に御利用下さい。

- ・ゼミ講義用等 }... 新図書館では2階に並びます
- ・新刊図書 }... 並びます
- ・参考図書 }... 新図書館では1階に並びます
- ・その他 }... 新図書館では地階に並びます（本のブックポケットにBFとゴム印が押してあります）

63. 9. 16 教養図書館



夜来香の花を召しませ

小 野 健 一

盛年不來重 一日難再晨
及時當勉勵 歲月不待人

陶淵明のあまりにも有名な詩の末尾四句である。人生の不安とはかなさを強調して歓楽による生命の充実を呼びかける詩の末尾であるから、「時に及びてまさに勉勵すべし」は「今こそ思い切り羽目をはずせ」とでも訳したら良いだろうか。盛年重ねて来らず、一日再び晨なり難し。一陣の風にたちまち散ってゆく路上の塵のようにはない人生の中で、そのひと所だけぱっと明るい青春に対する鑽仰にも似た憧憬が通奏低音となって読者の心を打つ。応用微生物学の坂口謹一郎先生がこの四句を短歌に訳していらっしゃるから紹介しよう。

うまさけをいやさ酌みませ若人よこのた
のしみを老いは待つべき

わかき日にまたもあはめやもうまさけに
酔ひたのしませ時過ぎぬ間に

生けるうち飲めるうちこそいのちなれあ
したありとはなおもひそや

(坂口謹一郎『愛酒楽酔』)

陶淵明が勧めるのは飲む楽しみではなくて飲んで騒ぐ楽しみだと思うのだが、先生のお歌は、どうやら飲む楽しみのほうが主になってしまったようである。

山口淑子『李香蘭 私の半生』を読んでいたら、同じ中国に上記の詩と同工異曲の「売夜来香」(夜来香の花を召しませ)という民謡があることを知った。原詞は不明であるが、

同書中にある散文訳を紹介すると、

夜来香の花は美しく、夜の闇にはの白く浮かび、かぐわしい香りを放っているが、その色も香りもやがては消え移ろっていく。いまのうちに楽しみましょう。花の美しさを、花の香を。いまのうちに買い下さい、夜来香の花を

誠に美しい民謡である。訳文も実に美しい。1945年5月、敗戦がもはや秒読みの段階に入った頃、上海のある劇場で、この民謡のさまざまな編曲で構成されたショーが上演され、当時、満州映画協会の中国人女優李香蘭で活躍していた若き日の山口淑子氏がそれを歌った。

フル・オーケストラのひかえ目な演奏の流れる中で、夜来香の花束を入れた白い花籠をかかえた中国服の彼女の独唱と胡弓の音が交錯する。歌詞の合間に短い台詞が入る。「夜来香はいかが」。呼びかけるたびに、数人の観客が誘われるようにして舞台上上がってくる。歌いつづけながら、アドリブで一輪ずつ花を手わたし、にこやかに会釈する。

ショーの光景が目に見えるようである。夜来香は別名月下香。月下の庭を芳しい匂いで一杯にする白い可憐な花。楚々としたかぐわしい中国の花である。

同じような趣きの詩がイタリアにもある。作者はロレンツォ・ディ・メディチ(1449～1492)。イル・マニーフィコ(豪華王)と呼ばれた彼はイタリア・ルネサンス最高の政治家の一人であるばかりでなく、同時に優れた

文人でもあった。彼の全集は現在も繰り返し出版されるだけの読者を持ち、ことに詩はファンが極めて多いという。この詩は八番まで続くのだが、残念ながら私の手もとには一番しか原文がない。

Quant'è bella giovinezza
Che si fugge tuttavia!
Chi vuol essere lieto, sia:
Di doman non c'è certezza.

メレジュコーフスキ『神々の復活』（岩波文庫）の中に米川正夫氏による迷訳があるけれども、私の拙訳も紹介すると、

うるはしきかな若き日は
とどめむすべもあらずに
心をやりて痴れよかし
明日をたのむはかたければ

この詩は当時のフィレンツェばかりでなく、イタリア各地で持て囃され、ことにヴェネツィアでは民謡として定着し、後々まで謝肉祭の乱痴気騒ぎには欠かせない歌になる。ヴェネツィア民謡になったロレンツォの詩は鷗外による散文訳が『即興詩人』（岩波文庫）下巻 342頁に載っているから、興味のあるかたは御覧頂きたい。日本人旅行者の誰か（ことによったら上田敏あたり）が持ち帰ったこの民謡に触発されて吉井勇の「ゴンドラの歌」は生まれたのであろうというのが塩野七生氏の推測である。

いのち短し、恋せよ乙女
紅きくちびる、あせぬまに
熱き血潮の、冷めぬまに
明日の月日は、ないものを

以下略

青春の移ろいやすさをいたむ詩は古代ギリシアにもあった。ギリシア詞華集の中の読人しらず：

花さうび、
花のさかりは
ひとときか。
過ぎぬれば、
尋ぬれど
花はなく
あるはただ茨のみ

（呉茂一『花冠』 129頁）

誠に、惜春の情は洋の東西を問わず總ての人の詩魂の核心に触れる根深い業であるらしい。最後にレオナルド・ダ・ヴィンチの言葉をひとつあげて筆をおくことにしよう。

Cosa bella passa e non dura

美しきものは移ろいてはかなし

（Forster 手稿Ⅲ、72枚目表頁）

こんな言葉を書くとき、彼の胸中には一体誰の面影があったのであろうか。ことによったら、彼が *viso fantastico*（幻想的なまなざし）と書いている聖カテリーナ病院の女性、『晚餐』の絵の中で使徒ピリポのモデルに使われているジョヴァンニーナという名の女性ではなかったろうか、などと想像を回らすのは楽しいが、実はこの言葉は彼の創意ではなくて、ペトラルカの一節の書き写しなのである。

（物理学）

『アモールとプシケー』

高津昌宏

『アモールとプシケー』の物語は紀元2世紀時代のローマの作家アプレイウスの『黄金のろば』の中に記録され現存するに至ったギリシア神話である。

プシケーはその美しさ故に美の女神アプロディーテーの不興を買い、怪物と結婚するという神託を受けるが、アプロディーテーの息子アモール自身が彼女に恋し、夜毎暗闇の中彼女のもとを訪れる。姿を見せぬ夫を怪物に違いないと確信するプシケーは、姉たちにそそのかされ、夫との誓いを破って、ある夜眠っている夫のもとへ灯火をもって近づき夫の姿を目にする。それは美しい青年アモールの姿であった。驚嘆するプシケーの手から、その時あつい灯油の一滴が彼の上に落ち、アモールはプシケーのもとから飛び去り、行方をくらましてしまう。後悔したプシケーはアモールを求めて世界中を探しまわると、アプロディーテーに捕えられ4つの難題を押しつけられる。3つの難題をやりおこせ、最後は地獄の女神ペルセポネーから美の小箱をもらって来るように命じられるが、地上に達せんとするまさにその時に、プシケーは好奇心にかられてその箱を開けてしまう。美は人間である彼女にとっては深い眠りとなって彼女を襲う。この危機的な瞬間に彼女を忘れ得ぬアモールが彼女を探し出し、彼女の目をさませ、彼はゼウスの許可を得て今や神々の仲間に加えられたプシケーと正式に結婚するに至る。

この珠玉のような物語は以来多くの作家や画家の想像力をとらえ、そこから新たな芸術作品が生まれ出た。文学においてこの主題を取り扱った作家としては、ラ・フォンテーヌ、ジョン・キーツ、ウォールター・ペイター、ロバート・ブリッジズらがいる。絵画においては、新古典主義時代、とりわけ1810年代から20年代にかけてこの主題が一世を風靡し、様々なヴァリエーションが生まれ出た。表紙に掲げたフランソワ・ジェラルルの『アモールとプシケー』（1789年）はこの流行のひとつの先駆となった作品である。

近年、この主題は心理学の分野で脚光を浴びている。分析心理学の大家ユングの2人の弟子たちが『黄金のろば』の心理学的解釈を行い、この物語に言及している。（ひとつはエリック・ノイマン『アモールとプシケー』、もうひとつはM-L・フォン・フランツ『男性の誕生』という表題で、いずれも紀伊國屋書店から邦訳が出ている。）物語の結末は女性の自己実現の完成であるとみるノイマンとすべてはやって来たもとの集合的無意識の中に沈みこんでしまうというフランツとでは、この物語の結末について全くちがった評価を下しているわけだが、さらには、男性であるノイマンが女性心理を論じ、女性であるフランツが男性の心理的発達を中心に論じているのも興味深いことである。

（英語）

閲覧ニュース 56号 1988. 12発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里1-15-1

発行責任者 手塚 甫

電話 (0427) 78-8005